

【氏名】花坂 哲

【所属大学院】（助成決定時）

筑波大学大学院博士課程 人文社会科学研究科 歴史・人類学専攻

【研究題目】

古代エジプトにおける技術・生産の考古学的研究  
ー地域社会と東地中海世界に目を向けてー

【研究の目的】

古代エジプトの技術・生産に関する研究は、支配階級の残した文字資料や図像資料を手掛かりに進められてきた経緯があり、また、考古資料を扱った場合にも墓の副葬品という特殊な例が多く、復元される技術は当時の最先端のものであった。

本研究ではエジプト中部の小都市であったアコリス遺跡の発掘調査によって出土した考古学資料を用いて、地域・地方都市において、民衆が手にすることのできた技術の復元を試みるものである。研究対象とした第3中間期から末期王朝時代（前11～4世紀）は、「国家」の枠組を離れ、東地中海世界との交易活動が地域・都市レベルでは活発に行われていたことが窺われ、東地中海世界からのヒトやモノの移動とともに、新しい技術もまたエジプトに導入されたと想定される時代である。地域・地方都市と東地中海世界というミクロとマクロの視点を持ち、発掘調査と復元製作実験という考古学的手法に基づいて、技術・生産の共通性や独自性を見出すことで、古代エジプトの技術を具体的かつ総合的に明らかにすることを目的とした。

【研究の内容・方法】

主要な研究フィールドであるアコリス遺跡の第3中間期・末期王朝時代の層位から、銅／青銅工房址や皮革工房址が発見され、ガラス製ビーズの製作も当地で行われていたことが近年の発掘調査で明らかとなっている。また、近傍の岩丘上には壮大な石灰岩採石場が連なっており、都市の主要産業となっていた。当時のモノの呼称や作業形態を推測できる文字資料や図像資料も重要ではあるが、発掘調査によって得られた出土考古資料は地域・地方都市の生活に根付いた技術を実感できるものである。考古資料の蓄積をし、工房の大きさや平面プランを明らかにするために発掘調査に従事することが本研究には欠かせぬことであり、2006・2007年度のアコリス遺跡の発掘調査に従事し、資料収集を進めた。

本研究は、中央集権的な政治体制が弱体化し、外国勢力が大挙して流入してきた第3中間期から末期王朝時代に焦点を当てた。古代エジプト国家史の観点からは「終焉・衰退の時代」とされるが、一方で、東地中海世界との交流が活発になり、様々なモノや技術が伝播した時代でもある。これまで学界で唱えられてきた技術・生産の研究では、エジプトの技術がエジプト独特の固有のものであるかのような印象を与え、地理的にも概念的にも「エジプト」という枠組みの中に留まっており、ヒトやモノ

の移動とともに同時に技術の移動もあった、という観点が抜け落ちていたのである。そこで、古代の銅の一大産出地であり、東地中海諸国を結ぶ位置にあったキプロス島においても、資料収集および踏査を行った。

また、技術復元の一環としてガラス製ビーズの復元製作実験を行った。アコリス遺跡ではビーズ用鑄型が出土しているが、これまでエジプト国内で知られている鑄型とは形状が異なり、それを用いた製作技法も明らかとなっていない。19世紀のアールヌーヴォーの時代に「発明」された「パート・ド・ヴェール技法」が、実は古代のガラス製作技法であったように、失われた技術を再発見するためにも復元製作実験は有効であると考えられる。

#### 【結論・考察】

発掘調査ではガラス製ビーズが2000点以上出土し、官営のガラス生産が途絶えたとされる研究対象期においても、地方都市では生産が続けられていたことが明らかとなった。それらのビーズの大きさや形状、製作技法などを観察記録して資料の蓄積を行い、ガスバーナーを用いてガラス製ビーズの復元製作実験を行い、加工温度や時間の違いによるビーズの仕上がりの変化などを比較した。しかし、バーナーに代わる古代の熱源に関してはまだ答えを得ていない。

また、皮革工房址の東西端を確認し、工房規模が明らかとなった。オランダ人研究者から問い合わせが来るなど、例をみない貴重な資料であり、研究成果のまとめに現在取り組んでいる最中である。皮革製サンダルは、植物タンニンで鞣したヤギ革の入手が困難なため、ウシ革を用いた模造品の製作に留まった。

発掘調査で東地中海諸国や紅海産の品が出土し、国家の浮沈に関係なく交易や交流が行われていたことが明らかとなった。個別の技術研究は、東地中海世界の事例も踏まえて進めることができたが、交易や交流と技術伝播の関係にまで踏み込むことができなかった点が今後の課題として残る。